

## 學界展望

## 市場論的と經營論的

山口 茂

拙著「流通經濟の貨幣的機構」に對する批判の共通的な中心點は、生産機構の問題乃至特殊價格水準の關係に言及しなかつたことにあつてゐた。この批判は拙著の表題からみても、また今日の問題の傾向からみても、充分に意味のある批判であると言はなければならない。流通經濟の貨幣的機構なる問題が今日の學問的潮流の裡に於て、單に市場論的のみ取扱はれたに過ぎないことは一應の不滿の對象となることは著者として完全に同感せざるを得ないことである。然しながらこの點は著者自ら此の著書に於ては計畫的に避けてゐたのであつて、その事は序文にもくどくどと斷つてゐた。即ち「一般物價的研究から個別價格的研究に、長期理論・一般理論的研究から短期理論的研究

に、市場理論的研究から生産機構的研究へ進まんとする一步手前に於てまとめたものである。尤も斯く序文で斷つても内容に於てしかくよみとりうべく著者の表現につくさざるものがあつたにちがひない。實は一二の私信によつてこの批判をうけた時は了解不徹底によると考へてゐたが、何れも同一の點に非難のメスを向けられ殊に鬼頭教授の一橋新聞紙上の批判をみるに及んで足らざるは著者自身であると自覺するに至つた。茲に於てその著者である私は生産機構の問題を避けた理由を私の考へてゐる全構想の裡にのべて、私の意圖を著書のとりあげた問題との關はりに於て述べ、續いて經濟學說史の上で經濟學構造の諸想にふれて粗放な學界展望を試みたいと思ふ。

私のあの研究は正統派經濟學の内容を佛蘭西經濟學の型によつて受取つたもので、單純素朴なる貨幣數量説から出發して、一般物價水準の理論を追及したものである。そして物の經濟と金の經濟とを分離して對應せしむる方法は金融市場を一應獨立せしめて金融論の對象たらしめんとする意圖に出たものである。貨幣數量説の内容としては金の經濟と物の經濟と對應する構想に於て、貨幣側から順次財貨側に移つて説明し貨幣價值の問題を個別價格によつて支へ、一般的貨幣價值理論として金を内容とする貨幣から組織的に配備された財の生産と流通即ち物の經濟を内容とする貨幣までを包攝し、貨幣價值主義の上での金屬主義名目主義の統合を結果せんとした。私が金屬主義にも徹せず、また名目主義とも云ひきれない態度は、むしろ從來の截然たる兩主義の問題とは異つた問題をもち、その異つた意味の兩主義の統合にたち至つてゐるからである。この點については高橋助教の指摘せられた様に銀行主義理論の研究によつて培はれたものと自覺する。斯くて一般的貨幣價值から出發したのであつたが、當然に個別價格規定に入らなければならなくなつたのである。しかるに茲に必要とする個別價格規定は經濟學一般理論に於て價格理論として普通に述

べられてゐるものではなく、個別價格間の相對關係の規定であつて、それによつて生産機構の動きを把握し得るものたるを要するのである。即ち私は一般的貨幣價值論乃至一般物價理論の財貨的裏打の役目を果し得て、然かも經濟の一般理論に於ける從來の價格論と異つた形の個別價格理論を畫かうと努力したのである。從來私の最も力をそゝいだものは經濟事情の研究であつて理論的研究ではない。その理論的研究力の不足も加勢して、この個別價格的研究は個別價格變動史となつてしまつて、何等理論的形態を結果するに至らなかつた。これは一般的貨幣價值から出發してその裏打としての個別價格を、一應部分乃至特殊價格水準に分ちその間の相對的關係として規定することを經ないで、直接に相對關係の理論として規定せんとしたこと困難があつたのである。然しながらこの困難は決して不可能を意味するものではなく、この研究が達成されるならば、網狀的關係に地位を占める個々の個別價格が各自の性格に基づく相對的關係を保つと同時に、一般的貨幣價值に照應するものとなるのである。これによつて貨幣價值の一般的性格と個別的な性格とが腹背の關係を保ち、相對的個別價格はそのまゝ網狀的關係に於て一般的貨幣價值の裏打となり得るのである。この意味に於ては相對的個別的な性格のまゝ個別價格理論の形態に接收せられて、特殊價格水準を經由せずして一般的貨幣價值に照應せられ得るのである。この困難は個別價格的研究が個別價格理論としての形態をとり得ないで、個別價格變動史となつてしまつたことによつて乘越えることを得なかつたのであるが、特殊價格水準を經由することを選ばれなかつた他の理由は一般的貨幣價值乃至一般物價のみを問題とすることでもとめたからである。斯くて一般的貨幣價值の裏打とした個別價格は個別價格一般となつてしまつて、網狀的關係に於て相對的価格を強く含んで居るまゝのものではない。即ち貨幣の價值をうらづける物の經濟に於ける生産費一般であつて、直ちに金の生産費

乃至價格によつて置換を得る態のものにすぎない。

以上の経過によつて特殊價格群による裏打は一般的貨幣價值を強く問題とすることによつて回避し、流通部面に於ける一般物價水準を問題とし、従つて生産機構を問題とすることをしなかつたのである。さればあの著書は生産機構の問題を容れ得る外廓的建築をなしたものである。物の經濟と金の經濟とを對應せしむることによつて建てられたブラックのなかに經濟的活動のモメントたる生産機構が或は個別價格の相對的關聯に於てそのまゝ理論的形態に接收せられたものを通して、或は個別價格群の相對的關聯を通しての特殊價格水準を經由して、畫かれなければならぬ。されば拙著は家だけが建てられてまだ造作も住む人もない様なものである。只貨幣數量説の沿革から見ただけでも一般物價のみが充分に問題となり得るのであるから、その成立と動きとに必要最小限の程度の生産機構の關係を容れてまとめたのである。然しその建築をみたますべき充分なる設備は上記二つの場合の何れかを通して行はれなければならぬ。

## 二

物の經濟と金の經濟の對立に於て一般物價を市場理論的に取扱ふ拙著のブラック建に設備すべき生産機構の問題が如何なる形にて入りこまなければならぬか。

この問題は上に述べた如く個々の個別價格を網狀的關聯に於てとりあげた相對價格理論によるか、又は個別價格群にまとめた相對的特殊價格水準の關係によつて取扱はれる行きかたがある。前の場合は一般物價と對立する個別價格

そのまゝの理論によつて一般的貨幣價值を裏打することであり、後の場合は一般物價と同じ考へ方乃至取扱方による特殊價格水準によつて裏付けることとなる。拙著に於ては前者による裏付けが困難であつたがために、その極限的理論としての個別價格一般の理論に赴かざるを得なかつたのである。若しその困難が克服し得ない場合には一般的貨幣價值乃至一般物價と個別價格一般の間に特殊價格水準を入れて生産機構の問題を解くと同時に、一般物價と個別價格との連絡をつけることにすゝむことが容易な途であらう。既に一般的貨幣價值と個別價格一般とを照應せしめた拙著の續きは一應この途が選ばれたものと解さるべきである。但しそのことは決して前の場合の放棄せられたことを意味するものではない。

何れにしても上の各様の方向は價格乃至價格水準の問題であつて、市場理論的取扱である。さればそれによつて生産機構の問題を分析して書き出すと言つても市場理論に關りをもつ生産機構の問題に過ぎない。近時の經濟理論別して景氣理論は生産機構の問題を主としてこの取扱方によつて處理して居ると言ひ得る。然しながら吾々はこの生産機構の問題の取扱方を經濟學說史の上に看るとき必ずしも上に述べた様な關係に於て論じられてゐたのではない。その由つて來るところは動搖或は景氣理論的要求や發展理論的要求が、今日ほどにはつきりした形をもつてゐなかつたにあつたらう。

今日までの經濟學史上に於ける發展の跡は何といつてもケネーとアダム・スミスとに對する批判の連鎖にすぎない。ギルド・システムやメルカンティリズムに對する批判に自己の立場を置くケネーとスミスはその後の學說發展の臺本となつたのである。さればその後の諸學說乃至諸學派は今日のそれに至るまでケネーやスミスの影の如きものである。

茲に問題とする市場理論と生産機構の問題はケネーやスミスに於ては如何なる關係として、また如何なる形に於て取扱はれて居るであらうか。そのうちには主として長期理論的色彩が強いために、生産機構の問題は價格乃至價格水準によつて完全に代表せられ得るが故に、特にそのまゝの問題として取扱はれる必要はなかつた。何となれば生産機構の問題はそれが價格乃至價格水準に吸収しきれずして、それとは別に分析する必要がある場合にどりあげられるのであつて、主として景氣乃至發展の問題が前面に推進してきた時からの問題であるからである。か様な理でケネーやスミスにこの問題がそのまゝの形に於て存しなかつたことに何人も異論はないであらう。吾々のみるところでは、この問題は個體經濟の如何に經營され構成されるかの形に於て存し、これを經濟社會の關係として生産論と分配論の結合に見出すであらう。後にジェー・エス・ミルが生産論と分配論とを、技術的關係に強く支配せられる背腹表裏の關係と理解して、第三編交換論と對立せしめたことによつて、よく了解し得る。即ち個體經濟の如何に經營され構成されるかの謂はゞ經營論的問題が市場理論的問題と對立して潜在乃至顯在してゐると見得るのである。拙著の市場理論的立場に對する補完理論としての生産機構の問題をケネー、スミスに於ては個體經濟の經營の問題として含んでゐると見得るのである。茲に於て問題は市場論と經營論の二つの立場が補完的關係に於て如何に取扱はれてゐるかを検討することになるのである。

### 三

斯くケネーに於てもスミスに於ても市場理論に對する補完理論として個體經濟經營の問題が潜在乃至顯在すると見

たのであるが、兩理論の組合せ方には兩者各特質をもつてゐる。

ケネーの理論體系は經濟表に見る如く經濟の全體的構造の外廓が強靱であり、その内部を三つに仕切る境界もまた強靱であつて、その裡に經營する個體經濟が合理的に統制せられてゐる。然しながらこの統制は外廓的統制に過ぎないで、その裡に於ける個體經濟の活動は自由である。これケネーの經濟學が自由主義經濟學として *Laissez faire, laissez passer* と言はるゝ所以であるが、そのまゝ統制機構を合理的關係に於てうけいれうる自由主義なのである。

即ち徹底した自由主義は合理的統制と結果に於て歸一すべしとする點を把握することによつて生じたシステムがケネーのそれである。而して斯くの如き關係が現實事態の裡に發生することは必ずしも容易ならざるを以て理論的把握の問題として自然的秩序の平面に於て考へられてゐるのである。然しながら經濟事象は日常茶飯のことであるが故に現實的秩序のうちにおのづから沈澱すべき結果として自然的秩序裡に於ける關係を考へ、自由と統制の連絡を考へたのである。この意味に於てケネーの體系に於ては市場的外廓が強く、個體經濟の經營は影がうすくなつた様であるが、三つに分離せる階級は近代的表現に於ける産業部門體系を構成するものであつて、生産機構の問題を靜的關係に於て顯在せしめてゐるといはなければならぬ。

これに反してアダム・スミスに於ては名目主義方法に基づくために經濟組織乃至市場の影は甚しく稀薄であつて、個體經濟の經營が濃く前面にクロース・アップせられてゐる。この個體經濟の利己的動機による合理的營利的經營が社會的におのづから交錯したる處に市場の影がみられ自然價格が浮び得る。向三軒兩隣の人々が *self-interest* によつて *bidding and bargaining* による取引の結果は所謂市場價格となり、その集まつたものゝ *ordinary or average*

ミミが自然價格である。されば現實の個々の市場價格が實際にふれ得る存在であつて、市場的に落付いてまとまつたものとしての自然價格も部分的なものたり得るのであつて、必ずしも一般的たるを要しない。拙著の様に此の自然價格をおそろしく一般的にし力あるものとしたのは、スミスをその様につかつた迄であつて、本來のスミスらしさを無視しそれから發展せしめたのであつた。理念的に見るならば自然價格と市場價格とは別の平面にあるものと解し得るし、また解しなければ自然價格の意味がよく了解し得ない様な兩者を、スミスは分離しないで實は造作なく取扱つてゐるのである。この様なスミスの取扱方はその經濟學敘述が市場理論的構想に於てせられてゐるにかゝらず、著しく個體經濟經營の問題が強く出てゐるとみなければならぬ結果をもちきたしてゐるのである。

以上のように等しく市場理論としてまとめられてゐるケネーとスミスの體系乃至敘述に於ても、補完理論としての個體經濟理論の強さが異なるのである。

然しながらこれらの場合に個體經濟の經營は現實の具體的個體經濟をとりあげながら、また産業部門的體系にあることを考へながら、長期理論的自然價格に吸収せられてしまふために、所謂生産機構の問題として現はれない。個體經濟の經營は單に價格のみを目標として行はれ、經濟社會の量的考察を一切不要とする。これは價格は一切の經濟諸量間の關係を一身に顯現するからである。また個體經濟が自己のために營む經營が自然的自動的に經濟社會の數量的調和を價格として現はし、この價格はまた個體經濟の經營の指標となる。此の關係は自然價格に於て最も端的に存するのであり、自然價格から離れた市場價格に於てはその變動に對し經營を即應せしめることの困難なる場合——生産設備其他の關係によりそれが普通であるが——にはその變動を經濟的諸量間の關係に於ける觀察から豫想することが

要求される。この意味で經營の立場からも生産機構の分析を必要とするのであり、また市場理論の立場からしても價格の變動のみによつて市場を把握し得たりとしてみることが出来なくなつて、こゝでも生産機構の分析が市場理解の問題として要求されるのである。然しながらケネーとスミスに於てはその體系乃至叙述が現實の動きから沈澱する落付きとしての自然價格に強くひきつけられてゐるために、生産機構の問題が出なかつたに過ぎない。

斯くしてケネーとスミスに於ては一樣に市場理論としてまとめられ、そのうちに個體經濟經營の問題が前者に於ては弱く後者に於ては濃く畫かれてゐる。而してスミスに於ては市場の外廓が軟弱であるために所謂綜合經濟として受取りうるにすぎないが、ケネーに於ては協同經濟體としてまとつたものを再び經營の對象とすることが出来る。即ちケネーのシステムが經濟國家經營の手段となり全體主義的計畫經濟に通じ得るのである。斯くの如き相違が英佛近代經濟學に於ける經濟政策の問題に異なる形を與へたのであり、此の考へ方は遡れば英佛メルカンテイリスムの相違にも至り得るのである。要するに市場論的と經營論的立場は互に補完的關係に於て兩者に含まれ、ケネーとスミスに於て何れか一方に重點を置くかは上述の如くであり、然かもその後發展した諸學派に對しては一樣に市場論的立場として經濟學發展史の基礎的臺本を提供したことになるのである。

#### 四

吾々は經濟學說發展の流れに沿つて看るとき一方に於てケネーとスミスの體系と叙述は長期理論のために一般市場を問題とするものなりとして——近づいて見るならば必ずしもさうではないと考へられうるが——これを批判し修正

せんとする立場と、その市場理論的立場をより純粹なものとなす立場とに分流したことを知る。勿論スミスの流れを汲む正統派經濟學者と、ケネーとスミスを綜合したジェー・ペー・セイ以後の佛蘭西經濟學とは共にそれぞれの方向に於て祖述發展し、市場理論と經營論とを補完的關係に於て構成する仕方に於ても、スミスらしきケネーらしさを市場理論的立場の裡で生かして發展せしめてゐる。即ち佛國に於てはセイ直後の合理的自由主義を根幹とする面々 Charles Dunoyer, Pellegrino Rossi, Frédéric Passy, Michel Chevalier, De Molinari は勿論のこと、普佛戰爭以後の二つの流れ即ち在來の古典主義自由主義をとり、英國學說に對して自らを開く *academicien* と、自由批評の立場にたち折衷主義をとり獨逸歷史學派に同情を持つ *universityaire* も、ケネー、セイの強き市場外廓を構想の規準としたことに變りはない。同様に英國經濟學に於ても市場理論的立場に於て個體經濟的立場を浮びあがらせ、遂にケインズに到達したのであつた。

他方に於てケネー、スミスをあまりに一般市場的なりとして反對し修正せんとする學派として先づシスモンディとリストのあること、次いで獨逸歷史學派の一連のあることは言ふまでもない。これ等の人々がケネー、スミスを以て或ひは *universal economy* なりとして、或ひは個々の個體經濟の交錯せる行爲の關係だけを浮びあがらせて、個體經濟を捨象した價格乃至自然價格を取上げ以て全體の統一をなす點から一般的市場觀に過ぎるとして反對し、積極的に歴史的國民的經濟理論を樹立せんとした立場は茲に『市場論的と經營論的』なる問題に於ける一つの立場と見ることが出来る。即ちこれらの面々は市場論的立場より個體經濟乃至生産機構の問題を引戻し經營論的立場をより強く夫の經濟學體系の上によみがへらせてゐるからである。蓋しシスモンディに於ては個體經濟が市場的關係に吸收され

て機械化し一般化することを排し、各自の特性と面目を保つ存在たることを強く主張する點は正に上の様に見得る根據であらう。またリストの普遍的經濟學を排して、歴史的現在を對象とする國民經濟學を考へ、自由貿易圈内に不利なくして入り得る以前の段階に於ける各國民經濟の特殊性を生産力乃至生産機構の相對性に求めてゐることは、『政治經濟學の國民的體系』を考へる場合に市場一般に吸収しきれない個體經濟の經營——個體經濟の産業部門的體系に於ける機能——生産機構の問題を市場一般からとりもどしてゐる證據である。歴史派經濟學に於ても一般的市場による普遍的經濟學に反對する建前から、經濟段階に於ける經濟構成の主體性を強く意識し、従つて個體經濟とその組合せに異常の關心をもつてゐることは當然である。

これを要するにこれらの學派は價格其他の經濟現象を、それを發生せしめる經濟主體と切離さざる關聯に於て把握し、經濟學を個體經濟に於ても國民經濟に於ても、主體性を強く顯現せしめんとするものである。この意味に於ては一樣に市場論的立場を狭めて經營論的立場を擴張せんとしたものと云ひ得るのである。而してこの傾向の最も著しく顯れた場合が所謂後の生活經濟學であらう。

これに反してケネー、スミスの市場論的立場を強化し純粹化したものに數理經濟學發展と關係ある均衡理論殊に一般均衡理論があることは言ふまでもない。これ等均衡理論は經濟社會を市場關係的に把握するものであつて、市場關係の由つて來る個體經濟も市場關係のシステムの主體も考へないと言はれる。然しながらこれは均衡價格を成立せしめる基礎たる個體經濟も、その全體たるシステムの主體も考へてゐないのではない。個體經濟は個體經濟一般として市場に於ける均衡價格に吸収され、均衡價格に顯現されてしまふのであり、システムの主體も natural order の sub-

ject であり、その subject の意思が個體經濟の合理的自由の活動を通して均衡價格として實現するのであるから、subject が前面に現はれる必要はない。subject がないのでなく、自らを現はす必要がないのである。この傾向はスミスの内容をケネーの容器に置いて純粹化したものであり、凡ての活動なり關係なりを價格におしこめた考へ方である。

以上の如くケネー、スミスの批評から出發して到達した均衡理論と生活經濟學とは經濟生活を理論として把握するに、前者は能ふ限り市場理論に吸收し、後者は個體經濟の經營におしこめ、以て夫々經濟理論の全分野に一應ゆき渡つた態を呈するものである。然しながら均衡理論に於ては經濟行爲の主體を捨象することに不滿が見出され、生活經濟學に於ては市場の全景を眺めるわけには行かない。若し兩者が互に相補ふ補完理論としてうけとられるならば、吾はそれによつて經濟生活のより十全なる理論的把握をなし得たと感ずることが出来るであらう。

## 五

ケネーとスミスの流通經濟學の外廓に強くひきつけられた均衡理論と内容を發展せしめた生活經濟學とは純粹理論として完成されると、兩者は同様に關係としての理論となつて直接に量的敘述を切捨てられるに至る。均衡理論に於ては經濟諸量間の出會ひが全面的な均衡價格を結果する場合に、その價格の高さだけが問題となり、需給の量的關係が價格にのりうつしてしまつて影をひそめてしまひ得る。斯く均衡理論をファイインに觀念するまで發展せしめると、均衡なる理念にまで高揚し得るのであつて、出來上つた形としては量を問題としなくなり得る傾向にある。かくの如

き傾向に於ては經濟的諸量は關係的作用として考へられ、例へば資本の如きも資本量として見ないで、迂回生産を可能ならしめる作用としてのみ取扱はれるに至るのである。

これに對する生活經濟學に於ても量的關係が叙述から除外される本來の約束にある。即ち個體經濟が慾求充當の調和を目標として合理的に營みをなしつつ自動的に國民經濟の全體が統一的に構成せられるプロセスを畫かんとする生活經濟學は、結局市場の平面的見取圖を作ることには問題でない。その直接の目的は個體經濟が經營さるゝことを通して全體としての國民經濟が如何に構成されるかを示さんとするものである。されば市場の問題は量的關係として展開されるのでなくして個體經濟が自らの營みをなす場合の行爲選擇の標準乃至行爲を決定すべき價值判斷の問題となるのである。斯くて生活經濟學に於ては市場關係としての經濟諸量の釣合の問題は充分なる問題となるにかゝらず、個體經濟の行爲の標準に吸収せられてしまふのである。

されば市場理論としての均衡理論も、經營論たる生活經濟學も同様に量的關係を充分に問題としながら、その高度の理論としては量的叙述を積極的にいれる餘地がなくなるのである。而してこの量的叙述の除外と相關的にこの二つの經濟學が純粹なる形に於ては靜態論なる概念にカバーされるのである。勿論均衡理論に於けると生活經濟學に於ける高度純粹なる理論に於ては靜態論なりとしても、その靜態論なる意味内容に異つた香りをもつものであるが、要するに『靜態論なり』として同じ引出しに容れることが出来る。而してこの量的叙述の除外と靜態論的傾向とは同時相關的發生であつて、この間に一方的因果方向をきめつけることは困難であらう。

ケネー、スミスの理論が批評修正された方向に於て斯くの如き高度純粹なる均衡理論と生活經濟學にまで發展した

が、その本家本元からの直接の流れは如何なる形に到達したであらうか。佛蘭西の場合はケネーに於て既に現はれて居ることであるが、セイに至つてより方法的に反省せられた形によつて現はれて来た *Positivism* によつて、經濟的事象の盛澤山な記述の裏側に直接に自然的秩序が看取さるゝ關係に於て、個々の事實個々の經濟者が生きると同時に全體シシステムが確立される。即ち個體經濟が雜然たる事實のうちに經營する關係がボディティブなものとして、そのまゝ純粹理論たるナチュレルなものとなる形として今日の佛蘭西經濟學を形成してゐる。

これに對し英國經濟學は市場理論として一方に於て個體經濟を切離した市場價格——自然價格を考へながら、他方に於て個體經濟を強く浮びあがらせ經營のプロセスを辿る。このうち流通經濟の外廓の規定を比較的強くもち世界市場の構成を考へ、各國の經濟を之れに結び付けるものが通貨主義理論であり、個體經濟の現實の動きから經營のプロセスを強く取扱ふものが銀行主義理論である。これ等は通貨理論ではあるが決して正統派經濟學から孤立したものでなく、英國正統派經濟學の裡に於ける構造上の二つの流れである。そして市場論的外廓を強く考へる通貨主義理論もマンチェスター運動と關聯する自由貿易論に結びつく程度のものであつて、佛蘭西經濟學に於けるバスチャ其他の自然的秩序に支へられたドクマ乃至ドクトリンとしての自由貿易理論の如き強さは持合せないのである。斯くの如き二つの流れは英國經濟學が——何れか一方に重點をおく相違はあつても——全體として含んでゐるところであつて、ケインズの如きは銀行主義を發展せしめたものを比較的多く含むものであつて決して正統派經濟學に對する革命ではな

5。

## 六

互に補充理論として意味をより大ならしめる均衡理論と生活經濟學は、上に述べな様に高度純粹なる形に於て靜態論に歸するが、それだけで經濟理論的要求が全部みたされるものではない。この二つの學派に於ける吾國最近經濟學界の著しい收獲は中山伊知郎教授と宮田喜代藏教授であることに何人も異論ないところであらう。私は最近兩教授の著作を熟讀する機會を與へられたが、兩氏ともそれぞれの靜態論的立場から離れて動態論的立場に發展し或は發展せんとして居らるゝ如くである。従つて純粹均衡による價格のみへの依存と經濟生活の意味的構成とによつて充分に問題とされながら、捨象された量的記述が再びとりあげられ或はとりあげられんとしてゐる。この場合兩者のもつ困難がもしあるならばその出發點に於て用意せられたアパレート乃至方法が最後まで役立つか或は理論發展への支障となりはしないかの問題である。

中山教授の場合は既に純粹均衡から不安定均衡への著しき躍進をとけて居られる。この場合純粹均衡理論時代の諸概念的アパレートはよくその性能を維持して大陸的均衡理論から英國的均衡理論への移動を可能ならしめ得るか。不安定均衡なる考へ方がケインズに據るものであることは言ふまでもないが、私は茲でもう一度その經濟學構造を檢べなければならぬ。卑見によればケインズ經濟學はアダム・スミスの價格構成論の貨幣側を發展せしめたものが通貨主義理論であるに對し、反對にその財貨側を發展せしめた銀行主義理論の流れに屬するものであるとみる。従つてその經濟學構造は流通論的立場を残しながらも、個體經濟の經營、擴張再生産的機構を中心問題とするものであつて、

個體經濟の經營の秩序を内側から發展せしめ、その順を追へる記述がおのづから經濟社會の理論的構成にまで延びる態のものである。この意味に於てはケインズの經濟學構造は市場論と經營論とを含み、その間に於て所謂生産機構を問題とし、しかも營利經濟的に動く個體經濟經營を強く生かさんとするものである。その貨幣論は價格水準を問題とする關係から市場論的立場を比較的強く含むけれども、一般的市場( $\pi$ )を切半してPとP'とを分けつくつたものではないことは、一般的市場を先づ考へる考へ方とは非常に異つて、經營論的立場に引きつけられる手掛である。これに對して一般理論に於てはより強く經營論的立場にたち、個體經濟の經營に當つて必要な選擇理論の連續によつて經濟機構の立體的體系を試みてゐるのである。

一般に市場論的立場をとる場合には個體經濟とその組合せの動きとを市場理論的に吸收し、經營論的立場をとる場合には個體經濟の動きに市場理論の見通しを含めなければよく成立し得ない。ケインズ一般理論に於ける消費性向や常數の理論は市場の見通しを合理的な形に於て個體經濟の經營の立場に押込めたものに外ならないと言ひ得る。市場的外廓を顯在せしめないためにそれは著しく閉ぢられざる體系の形を呈してゐるが、閉ぢられたる體系はむしろ裏側に潜んでゐるものと見られるであらう。斯くの如き貨幣論と一般理論によるケインズの經濟學は動搖と發展とを問題とする經驗的現實的理論、短期的機構的理論であるために靜態と動態とを峻別せず、市場論的と經營論的とに適當な折合をつけることが出來、純粹理論としての尖鋭さのために骨組だけを残して截然と二分してしまはなかつたのであらう。そして齒切れは悪いが豐なる聯想を容れ得る英國流の經濟學となつたものである。中山教授の大陸的より英國への進攻は途には幾多の困難はあらうとも、これによつて經濟的動搖と發展とを中心問題とするに至り、關係理論

としての經濟學が同時に量的理論としての經濟學たる意味を從來より深めることが出来るであらう。

宮田教授の純粹經濟學的なる生活經濟學が、動搖發展を含み量的考察の顯在へと進み、眞に歴史的的政治的理論への要請に答へ得る生活經濟學たらんとして動いて居るが、如何なる方向をとるかはまだ明かではない。吾々は茲でもケインズ經濟學が一役買つて出得る性質をもつて居ると思ふのであるが、その間の困難は方法の問題である。宮田教授の生活經濟學にとつて意味了解の方法と構成論的立場は本質的に重要なものであるが、ケインズ經濟學に於てはその何れもがしかく純粹なる形に於てではない。若し宮田教授がこの方向に進まれるとすれば、この點につき宮田教授がケインズに接近するか、宮田教授がケインズを自己に引付けるか何れかの形をとるであらう。

ケネー、スミスを臺本として批評修正した結果市場論的と經營論的とに分れたことは理論的に嚴密純粹なる方向に進んだ當然の結果であつて、全體と個體との二元的なるものゝ本體につき進んだ結果である。ケネー、スミスの祖述としての佛蘭西經濟學に於ては市場論的なることを中心とするが、兎に角ポディティビズムによつて規範と現實、全體と個體との關係を結び付けたが、英國經濟學に於ては經驗的な個體經濟を中心とし全體としての市場論的なるものは名目的なものとし、従つて閉ぢられたる體系となりにくいことは今日に於ても續いてゐる。されば純粹理論的なる方向に於て一般均衡理論と生活經濟學となつたものが、經濟的動搖發展を含む形に於て發展せしめられんとするとき、ケインズに歸るとしてもそれは單なる復歸ではなくケインズを使驅するのである。それは出發點を活かすために必要であり、單にケインズに移ることは方法上許されないからである。

拙著『流通經濟の貨幣的機構』は既に述べた様に、正統派經濟學の内容を佛蘭西經濟學の外廓に入れたものである。

ために、理論的尖鋭化のために截然と分離せざるを得なかつた獨逸の均衡理論と生活經濟學の如き關係にはなやまされはしなかつた。然しながら全體と個體との結びつきの問題はこの場合にも容易なる問題ではない。經驗的具體的なものをボディティヴなるものとしてとりあげ、これをナチュラルな規範によつて裏付けるとともに、市場論的部面を交換媒介なる職能により、經營論的部面を價值保藏の職能によつて夫々を統一構成したものが、現實の貨幣なることによつて市場論的と經營論的とが結びつけられることが考へられる。然しながらこれによつて果して眞に二元的立場の調和が得られるものと解してよいか。問題は永遠に續く割りきれざる循環小數の如きものではあるまいか。

(二六〇〇—七一—稿)

#### 本號執筆者紹介

川上多助氏	東京商科大学教授
加茂儀一氏	商學士
板垣與一氏	東京商科大学助教授
山口茂氏	東京商科大学教授
高橋長太郎氏	商學士
内田直作氏	東京商科大学東亞經濟研究所研究部員
根岸國孝氏	東京商科大学専門部教授
常盤敏太氏	東京商科大学教授